

うがない。

羽織袴（はかま）姿で、校長を官舎に訪ね、礼を尽くしてオルガン購入をお願いした。結果は、終戦までの四年間、昇給差し止めだつた。

先輩の音楽教師は教頭で、管理職だから、学生のオルガンの進度を検閲する時間がない。私が代わって指導したのだが、全校を一人でやるには、毎日午前八時から午後八時までかかる。二年目からは、音楽専攻科の学生と進度の早い学生十人に応援させた。

一部生の予科二年間でバイエルを終えたのだから、将来を楽しみにしていた。ところが、三年日の昭和十八年から学徒動員が始まり、応召、戦死した学生も多く「全県下に音楽を」という私の野望は、ついに果たせなかつた。

（西日本新聞 平成五年十月十日～十七日）

### 回顧

庶務課文書係

明治二十年十月時を同じくして生れ爾来具に芸術の殿堂として世に誇り六十有余年の歴史をおえ、その幕を閉じる東京美術学校・東京音楽学校を記念し、ここに謹んで回顧致したいと思います。  
若干の思い出の中に新しい芳芽を見出し得れば幸いに存じます。  
なおここに学報特集号として発刊するに当つては学長を始め諸職員の御協力に深く感謝し併せて御礼申上げます。

昭和二十七年四月一日

回顧 東京美術学校 特集号

東京藝術大学庶務課

### 序

昭和二十七年三月三十日に東京音楽学校は第六十二回の卒業式を行ひ、最後の卒業生を送り出した。二十七日から三十日にかけて行われた卒業演奏会については本百年史『演奏会篇第二巻』に掲載済である。三月二十九日には東京美術学校も第六十二回 最後の卒業式を行つた。翌四月付で東京芸術大学庶務課より学報特集号として両校を回顧する贋写版の印刷物が出されている。内容は両校の沿革略、両校関係者による回想文などである。序文と音楽学校関係の部分を転載する。

東京音楽学校及び東京美術学校は、本年度卒業生を以て、夫々六七年に亘る長い芸術の専門教育を形式上閉ぢることになつた。併しこれと同時に己に三年前から東京芸術大学が成立し、両学校の伝統を受けつぎつゝ生育して來たのであるから、一方で最終の卒業生は又他方で初期の卒業生とも言へる。従つて古い卒業生も新卒業生も、皆東京芸術大学にとつては、同窓生であり、先輩であり、従つて又卒業生諸君も、東京芸術大学を母校の継続としてというよりも、母校其物として親しまれ、仲間として認め、利用もして煩しく、厚意をよせて貰ひたいと思ふ。大学側として諸君を送するに、

この心持ちをもつてることを此際表白して置く。

(昭和二十七年三月二十九日)

### 「師範科」を送る

音楽学部教授 下 總 晓 一

いよいよ東京音楽学校という名が名実共に全く消えてしまう。と思えば多少の感慨なきにしもあらずだけれど、實際は芸術大学音楽学部として存続しているし、それも三年前にほとんど名も變つてしまっていたのであるから、今更大して感傷的な気持にもならない。だが、それは本科の場合だけであつて、師範科というものはこのまゝ全く消えてしまうのであるから、その意味からは何としても名残り惜しい氣がする。歴史的にいつて、本科が先にあつて師範科が後に出来たのか、又はその反対なのかそれは私は知らない。又それは今どちらでもいい事であるが、私は師範科というものが全くかえり見られなくなつて来ただんだんの原因を考えて見たい。その原因にはいろいろなものがあるかも知れないが、中で一番大きな原因是、師範科の卒業生たちがだんだんと自分自ら、自分たちの道をせまくして行つたからだという事が出来ると思う。そもそも師範科への入学は、その指導の先生から、本科を受験するには力が少し足りないから師範科をとすすめられて不本意ながら志願したのである。さて入学して見ると、何と考へても本科が羨ましくてたまらない。大して力もちがつているようにも思えない。何とかして本科生なみになりたいと思う。憧れのまとは本科である。転科出来るものならしたい。地方の学校の先生なんてしたくはない。卒業したら本

科生といつしょに研究科にもはいれるならばいりたい。新聞社主催のコンクールにも出られたら出たい。放送もさせて貰えるなら……等と寝てもさめてもそんなことばかりを考えているうちに卒業期となる。東京に残りたい、勉強したいという。勉強の目的は本科の卒業生と力を競いたいのであつて、決して教壇にたつてより力の優れた教育者になりたいというためではない。これは實際一人や二人の例ではない。殆んど全部なのである。教育者になる人が技術が下手であつていい筈はない、むしろ常に優れた技術がなければ立派な指導者にはなれないのである。所が實際は上述のような有様である所には衰れが残る。なお近年までは文部省の命令というものがあつて、泣く泣く地方へ赴任させられたのであつた。それも赴任後一年か半年経つと東京に舞いもどつてしまふ実状であつたがこの四五年は命令もなくなり、義務もなくなり、せめて僅か一年か半年の、地方の開発さえもなくなつてしまつたのである。これでは師範科というものは有名無実、本科生の数を師範科生の数まで増して入学させ、卒業後はその多数の人々のためにステージがあふれ、東京の学校の教壇もあふれ、どうにも東京にいては生活出来なくなるのを待つて、徐々に自然に地方へ少しづつ流れて行くのを待つよりほかに方法はない。

私は昔の師範科の卒業生が、卒業式が済んだ後で、○○県へ奉職すべしという辞令を貰つて、思いもかけぬ赴任地の地図を涙にかすむ目でさがした時代を、今更乍ら却つてなつかしく思ひ出すのである。その人達の何人かは、一年どころか何年もその土地に居ついて、自分の次代の音楽家（わが子又は教え子）にそのかなわぬ望み

を託してしまつて、とうとう東京には帰らずに尊い犠牲となつたのである。私は、然しその人たちにこそ感謝と敬意の頭を下げる。一生憧れてのみいて徒らに東京に朽ちてしまつた多くの人々は、たゞ哀れを催おすばかりである。

## 回顧

音楽学部講師 宮城道雄

邦楽が音楽学校へ本科として取入れられてより、このたびの修了まで箏曲科を無事に担当させて頂いたことを感謝いたして居ります。

私の生活中、最も愉しく思ふのは、この学校へ通ふ上野の杜の道すがら感じる四季のいろいろであります。春の花、鳥の声、夏をつぐる蟬の声や、秋は虫の音に。又、人に聴くもみぢの色、初冬には銀杏の実を落す音、又肌をさす寒風に吹きまくる砂塵の音、天気のよい日には動物園へ行く家族連れの足音や、遠足の音、動物園から時々洩れるいろいろの声など思ひ合すと、限りない面白さがあります。

しかし、私がつらく感じたことは、先般、邦楽問題で辞職した時に残してきた生徒のことが忘れられず、子供を残して里に帰つた母親の気持は、このようなものかと思ふようでした。

そして、何とかして専門学校の残りの箏曲科を私の手で卒業させたいものと祈つておりましたところ、学校当局や、諸先生方の御配慮により、その願いのかなつたことは、私として終生忘れられぬ喜びであります。

邦楽のみならず全生徒諸氏に対しても、私はこの音楽学校の終りと云ふ歴史的意義深き卒業に対し、今後大いに活躍せられるよう、前途を祝福しつゝこの言葉を終ります。

## のんびりと勉強出来た思い出

音楽学部教授 城多又兵衛

もう上野の山に足をふみ入れてから、三十年近くになる。七十年余りで、その寿命を閉ぢた音校の半分を知つてることになる。三十年前と今と変わらない感じは入試である。入学試験丈は、昔も今のように猛烈な競争をしたように覚えている。私も二度目に入れて頂いた。

第一回目には最後の試験まで受けることが出来たので得意になつていた。いよいよ身体検査の段になつて、はねられた。その時の勝利者はヴィクトーで寵児になつた徳山璉一人だつた。女子軍は余り関係がない。その翌年に男は私一人と云うことで入れて頂けた。当時は現在のよう、上野と同格の学校がなく、その競争は今よりは深刻であつた。数年后であつたが、声楽を受験して失敗した。そのとき先生に「君は声がないからネ……」と云はれたと云つて、当時流行のカルモチンをのんで永遠に眠つてしまつた。その人は私の友人の妹だつたので、御通夜に行つた。白蠟のように美しくなつて眠つてゐるのを見て、考えさせられた。例え音校には入れなくても、命をかけて、声楽を愛し、音楽に希望をかけて、その希望がないときまれば、生命も消そうとした真剣な考え方を尊く感じた。私達は幸にも入学出来たが、本当にこの妹さんのように音楽を愛し、生命

としているかしらと真剣に話し合つたのが忘れられない。

学校の生徒は授業が終ると大急ぎ帰るのが普通だつた。従つて学校は午後になると誰も居なくなる日がある。そんな日には吾のよう下宿している者——当時の学生は大ていピアノを持つていたが、近所の人々がうるさいので、大声を出す練習は学校で練習した——夜はおそらく練習をした。二時半すぎると疲れるので残留組で山下の永藤にビスケットをたべに行つた。当時の永藤の店頭には試食のビスケットがあつて、コーヒーをとれば試食が出来た。又、残留組は先生によく、御馳走になつた。当時は勉強さえすればよいので、よい点が欲しいわけでもなく、ほめられる必要もないのに、学校に対するは実にあけっぱなしの生活をしていた。従つて先生によく思はれようとも思はず、教えて頂ければそれでよい。先生方もそう思つていらしやつたらしい。先生もあけすけに勝手なことを云う生徒をよく可愛がつて下さつた。師事していると否とに拘わらず皆親しかつた。今は習つていない先生には挨拶もしない学生を見ると「冷たいナ」と感じる、これは昔の生徒と余りに気持が異なるからだ。

T先生はドイツ語の異色のある先生だつた。T先生の授業は厳格を極めた。それで生徒はいつも、ギュウ／＼の目にあわされていた。何とか腹いせをし度いと日頃から考えていた。ある天気のいい日T先生得意の足どりで——T先生は歩き方に特色があつた——登校された。皆は手をたたいて、「先生お待ちしていました」と大声で呼びかけた、T先生大変御満足。コートぬぐのもそこ／＼に教室に来られたが誰も居ない。T先生カンカンになつて、学校中を探し廻つた。学校中を探し廻るのは先生の特技だつた。どこにかくれて

いるかを、よくかぎあてる。その日は仲々見つからない。しかしとうとう皆見つかつた。かくれ場所は女子は寄宿舎、男子は便所に入つていた。永くかくれて居られる場所ではないのでT先生のこん気に負けた。早速、一人一人動詞の活用をやらされた。これほど骨折つても怒らず学生も悪戯にすぎないところが、今楽しい思い出である。昔は学生の校外演奏は禁止だつた。それをこつそり演奏した者がいた、誰だか学校にわからなかつた。生徒主事が「過去のことは、とがめないから、誰か云え」と生徒にもちかけた。純眞な生徒はそれを真に受けて、口を割つた。生徒主事はそれをとり上げて学校長の命令として停学を云い渡した。怒つたのは生徒だ、生徒主事に取消を要求した。学校も困つて取消しはした。しかしこのころから生徒主事の云うことは信用すると「アブナイゾ」と誰も云ふともなく云い出して、学校と生徒との間に溝が出来、戦争中は益々変なものになり終戦のドサクサに突入してしまつた。

戦後も幾回となく学校と生徒の関係は波瀾があつたが一応は平靜になつて、音校の終止になつたことは嬉しい。しかし、学校と云うことには余り氣を使はず無心に勉強していた昔がなつかしい。単位があろうと、学士になろうと、卒業免状があろうと、音楽が貧弱であつたら何の役にも立たないので云うことのよくわかる大学生になつて欲しい。これが音校の回顧から得た結論だ。

### 思 い で

音楽学部助手 大和田愛羅

愈々此三月で東京音楽学校も長い間の樂会にとり輝かしい歴史を

後にして廃校となりますが誠に哀惜の情に堪えぬ思いで一杯であります、何か思い出をとの事であります。が現在分教場に御厄介になつて居りますので分教場の過去現在に就いて一つ二つ記しましよう。

自分は古く明治四十二年の本科声楽部の出身ですが当時の分教場は一つ橋、現在の教育会館の跡の様記憶してますが木造建築で古い建物でした。授業は洋楽が主で邦楽としては箏曲科丈けの様でした。本科生の教育学受講者は毎年三年生になると二学期頃から実習生として一週間づゝ出張し、当時の乙種師範科生に唱歌を中心として指導実習をしたものでした。主事さんは国語の先生鳥居枕先生でした。時々私共の授業振りを御覧になつて色々と御注意を戴いたものでした。卒業後三年程授業補助者として嘱託せられ勤務しました。分教場で現在の選科生並みに夕方出かけて指導したものでしたが教え子の方々の中現在尙ほ立派な音楽者として活躍されている方も相当居られます。当時同声会の一部（在京の方々の為めに）土曜会と言ふものがありまして之は小山作之助、島崎赤太郎両先生が主になりました。毎月第一土曜日の夕方から分教場に集まり歓談し散会後は必ず懇親的に外の御店で会食したものでした。之もよい思い出です。自分も四十四年頃から東京府の女子師範学校に就職することになります。からづつと分教場には御無沙汰しましたが土曜会には必ず出席して居りました。福井直秋先生も常に御出席でした。分教場も昭和三年頃から現在の場所に移転した様ですが分教場として一番はなやかな活動時代の乗杉校長時代の事は遠くからながめては居ましたが深い事は存じません。昭和二十一年の九月から現分教場の主事として御厄介になり前任で居られた眞篠、下總両先生から事務

上の事を継承して今日に至りましたが何分終戦後間のない然も一年間程休校になつていた其後に就任しましたので未だ事務員もなく自分が何もかも事務上の事をやつてたのですが間もなく事務員の方も見え仕事も進展しました。自分が監督上一番困つた思い出としては、盜難、無断外来者の出入、無断楽器使用、電熱器の使用（電気料金の罰金等も）臨時寄宿舎的に能楽堂に宿泊して居られた、本校生徒と選科生の衝突等数え来れば多々ありましたが之等の取締りには相当苦労しました、然し之等も徐々に解決解消しまして二三年一月頃には生徒も自肅を感じ自治会を創設、楽声会と名付け時に生徒会等も開き活動を始めましたが、当時の時代の思潮とも云うか、又多少外部の刺激を受け入れてか色々の要求を持出すなど多い、また賑やかな時代だつたと思います。然し之等要求も合法的なものは之をいれ、改良すべきものは改良して小宮前校長の御助力御許可により、

一、教授用以外の楽器使用を本校なしに許可された事。

一、従来個人々々の年度制であつたものを一律に学年制にして三年終了者は試験の上修了せしむること。

一、従来修了者を教官の許可により引き続き二ヶ年繼續修了を認められたものを、修了者中技術優秀なるものを研究科生として一年二年生と改良せられた事。

以上のような従来の選科規程の一部を変更して今日に至つたものであります。

此度廃校になりますので来る三月二十二日を期して最後の修了者を主にした演奏会を開催する事になりましたが、昨年四月から芸大

の別科生が一所に学んでいる関係上別科生も演奏をともにして賑やかに思い出深く終了する事に致しました。尚お三十日には午前十時から本校生の卒業式に列して總代を出し現在員約百三十名が日出度く修了し、東京音楽学校の廃校と共に終了、長い歴史を後に幕を閉ぢたのであります。

「東京音楽学校門標がなくなるに就て」

音楽学部警務員 神 崎 舜 爾

学報係より私に投稿される様再三の依頼により巧なき文を披露致す次第です。

本年三月三十一日を以て古い伝統を誇る上野の森の一遇に掲げてあつた、東京音楽学校の門標も姿を消す事となり、私として實に感慨無量の念にうたれます。

しかし、時代は一変し本校も昇格して、東京芸術大学音楽学部となりました。

永い間、私も音校の巡視として奉職して居りますが、第一光榮に浴した事は天皇、皇后両陛下を始め皇太子殿下各宮殿下再度の御臨校の際身近に御奉迎申上げ出来たのも音校の門番なればこそ有得たことと洵に恐惶感激致しました。

封建的教育を受けた私は今日の民主主義を唱える人とは雲泥の違いで腑におちません。例えは与えられた仕事もやらず勝手氣儘の行動を取り、其責任を他に負わせようと云う者さえあるように見受けられ、是で公務員の一人であるかと疑われることがあります。

古人の言に曰「百の空言は一つの実行に如かず」と。小学校に居

つた頃先生より訓諭された事は忘れません。

今や日本には軍隊はありませんが、軍隊教育を受けた一人としてその良い所を身につけ門衛のお爺と云われ、先生や生徒と親しみ及ばずながら職員を勤めて居ります。日支事変更に大東亜戦争中で人の心が恐々として居た時厳格なる乗杉校長先生在職中であります。その時より居残つて居る職員は町田局長、大柳課長と他の二、三名の者に過ぎず此間苦難の道を歩き学校行政に碎身して盡された町田局長や大柳課長の努力は言葉を以て表わすことはできません。それ以来引き続き校舎内外の清潔整頓は申すに及ばず、万事注意を重ね御奉公したと思つても先生には御意にかなわず大喝一声怒られたものです。其の時代と今を比較するのは無理かも知れません。唯今日に至つた事を感謝します。過去の話しさは盡きませんから夢と葬り去ります。

間近に講和條約も成立、独立國家として再建を目指す芸術大学職員一同は、相信し、相援け、一致協力益々職務に勉励上司の命に従いましょう。それでも学長や諸先生のみでは学校は成立たず、事務職員、門衛、小使各自の職分を果すことに依つて運営出来ることを考えます。

皆さん、身体が達者でなければ務めは果せません。健康が第一に大切です。

さよなら 東京美術学校

東京芸術大学東京美術学校、東京音楽学校の、卒業式は多彩の催の中に取行はれこゝに明治中紀上野の山に咲いた美術、音楽の殿堂は世に多くの芸術の華を咲かせつゝ六十余年の幕を新しい世の芸術大学に引継ぐべくこゝに閉じた。

#### ○東京芸術大学東京美術学校卒業式

第六十二回の卒業者を最後とし三月二十九日、午前十時より美術学部講堂において学長、学校長各科教官、職員、卒業生及文部大臣代理を初め先輩等多数来賓出席のもとに盛大に挙行された。

#### 式次 第

- 一、学校長告辞 村田良策
- 二、卒業証書授与
- 三、学長式辞 上野直昭
- 四、文部大臣祝辞 大臣代理
- 五、卒業生答辞 卒業生総代
- 六、校歌合唱
- 回顧講演 (自午前十一時於美術学部講堂)
- 日本芸術院会員 結城素明先生 (明治三〇 日本画卒)
- 全右 香取秀眞先生 (リリ 鎔造卒)
- 全右 板谷波山先生 (リ二七 彫刻卒)
- 東京美術学校同窓会結成
- 準備委員会 (自午後二時於美術学部講堂)
- 卒業製作展 (自三月二十九日至三月三十日於美術学部)

○東京美術学校回顧展 (自三月二十九日至三月三十日於正木記念館)

第六十三回、最後の卒業式は学長、学校長、各科教官、文部大臣代理、武藏野音楽大学長、父兄等多数来賓出席のもとに三月三十日午前九時より音楽学部奏楽堂において盛大に挙行され当日を飾る卒業演奏会も合せて実施された。

#### 式次 第

- 一、卒業証書並に修了証書授与

#### 二、賞状授与

- 三、学校長告辞 加藤成之
- 四、学長祝辞 上野直昭
- 五、文部大臣祝辞 大臣代理
- 六、卒業生答辞 卒業生総代
- 七、合唱「仰げば尊し」

#### ○卒業演奏会 (於音楽学部奏楽堂)

- 二十七日
- 二十八日 洋樂
- 二十九日
- 三十日 邦樂、洋樂。